

ここら神域もたげて蝮草は実を 佐怒賀直美

（句集『心』平成二十九年・本阿弥書店刊）

十一月二十六日「橘」四十周年記念及び主宰就任の祝賀会が開かれ、この第四句集も配られた。あとがきにも記すように、先師・松本旭の「心」を引き継ごうとする深い思いを胸に日々精進した成果を世に問う句集になっている。

この作者の良さは具象的にもものを掴み取ることである。素材的にも、古典的な〈竹の根の飛び出て寒の月夜かな〉から現代的な〈腕時計輪になるやうに置いて秋〉まで、関心の対象は広い。特に、小動物に対する作者の好奇心と愛情は本句集の温かな印象につながっている。〈猫の髭水平夜は臙なる〉〈窓叩く猫の掌丸く春めけり〉〈瑠璃蜥蜴一步を高く上げて処暑〉〈手に包むインコの欠伸冬ぬくし〉などの客観写生の佳品には具象を季語による抒情性が包む。

一方、〈チューリップ散る不器用に莖立てて〉〈束の間を膨れて冬の流れ星〉〈子に背丈抜かれわつさと柿若葉〉〈継ぎ目なき青空びつしりと冬芽〉〈霜柱二寸が丈に青溜めて〉などに

は、直感力を生かした主観写生の生きの良さを感じる。特に「柿若葉」の句は、日頃作者が大切にしている新鮮な家族詠である。「わつさと」の誇張法も子の成長を愛でる親心が、若葉の明るさと量感と共に歓喜の表現となる。

これらは瞬間的な感興を表現した作だが、〈海に戻れぬ潮の匂ひたる秋暑〉〈河は海へ海は彼の世へ暮の秋〉〈秋声や西に色づく雲二つ〉〈蚯蚓鳴く神住む国の真ん中に〉になるとあと少し思索や感受の時間が長く感じられる。想像力や深い感受性がより広い世界を引き寄せる。特に、「松本旭先生逝く」の前書のある〈河は海へ〉の作は広やかなイメージの深い鎮魂句である。

ところで、冒頭の句は、境内の杜の下藪などに蝮草の実を見つけた折の句であろう。「ここら」という口語に始まり、加速度的に焦点を絞っていく速度感が鮮明な印象とつながる。神域に蝮草の実とは異端のようだが、鬼神めいて堂々と生命感を主張している。毒々しい赤い実を毅然と「もたげ」ながら。句末を「・・は／を」と切るのは先師・松本旭の文体の一つでもあった。ここにも師の息づかいを体得している作者の飾らない主張が見える。

生と性と死と朝の蜘蛛おりてくる 赤羽根めぐみ

（平成二十九年年度、第三十五回現代俳句新人賞受賞作

「おりてくる」三十句より）

赤羽根さんは、昭和四十七年生まれ。新しい世代の新人の受賞を心から祝したい。しかも、今年は現代俳句協会創立七十周年の記念すべき年。さらに、現在所属している「軸」の創刊五十周年記念の新人賞も得た。自分の独自の感性へのたゆまぬ問いかけの努力が実った。

受賞の言葉の中で、「普段接している膨大な数の現実を、俳句というものを通して見ている不思議さ。掴み取った現実の鮮度を極力落とさぬように、実感のある言葉で一つ一つ俳句にしていけたらと思います。俳句を信じて、自分を信じて。」と述べている。現実を「俳句」を通して見る。現実把握の鮮度を落とさぬ、実感有る言葉による表現。この二点は貴重な示唆である。

選考委員の評も、「潔い自分への美学」（大石雄鬼）、「現実の手触りの向う側にも目を配り」（渋川京子）、「前のめりに力

一杯生きてゆくことが、若さという形容と同じであった時代の雰囲気を彷彿とさせる」（田中亜美）、「比喩が独特で、ナイーブな感受性」（対馬康子）、「俳句の虚実のブレンドがよろしく、その上で一句に「実」の手触りがしつかりとある」（照井翠）、「日常的事象の個人的な把握が際立ち、新鮮で詩的な句」（橋本輝久）、「日常の平凡に見える出来事を、詩的世界に昇華する言葉の訴求力」「定型詩としての緊密度」（山本左門）など、いずれも正鵠を射て納得される。

私も特に共感したのは、次のような句だ。〈桜桃忌椅子に甘えている男〉〈冬晴の果てなきノート折れば海〉〈ストープに惑星たちの椅子が無い〉〈首の裏つめたしフランス製インク〉〈うさぎ抱かれて足首を交差する〉〈葉桜やロックフォールに星の息〉等。いずれの句も虚を突かれたような新鮮な驚きとともに、虚の中に実の確かさと深さがある。「惑星たちの椅子」のユーモラスで壮大な想像句から、「うさぎ抱かれて」の思わぬ親しみを引き寄せる日常句まで、「おりてくる」三十句は読者を自由な詩的感覚の世界に心ゆくまで遊ばせてくれる。冒頭の「朝の蜘蛛」の句も同断で、通俗な「生と死」の中間に「性」を置いた企みが思わぬ深い意味を投げかける。

デボン紀の青を下さい 五月の海 山中正己

(句集『静かな時間』平成二十九年・ふらんす堂刊)

これまでの三冊の句集作品抄にこの五年間の新作「静かな時間」の章を加えて第四句集『静かな時間』が上梓された。以前の代表句には、明るく軽快な句が多い。

髪切つて妻アルプスに挑戦す 「空想茶房」

いわし雲見てゐるやうなキリンの眼 『キリンの眼』

一月の青い地球のワルツかな 『地球のワルツ』

一方、前句集『地球のワルツ』には、〈被曝せし絮たんぽぼの行方かな〉〈ボクたちのイマジン十二月八日〉〈八月や海図のやうな染みがある〉などに混じって、〈八月の白髪を梳く疎開児A〉という戦後七十年の時間も深く刻まれた。

日本国憲法九条さくら餅

七十年撃たざる国の晩夏光

新作では、これら昨今の社会を見据えながら非戦平和を主唱する、柔と硬の社会批評の文体に学ぶことが大きい。

デラシネのごと寒波の底に蹲る

ライバルは黄泉の人なり草矢打つ

もう一つの特徴は、晩年自由の生き方をめざす自分を語る句が多いことだ。しかも、比喩により老いの心境を、造型的に深刻を怖れずユーモアラスに表白する。

嫌なことしない生活とてん

たぶんもう動きたくない秋の河馬

これらの軽さも、晩年自由の願いと無縁ではない。口語的発想と剽軽なリズム。置酒歓談の際の正直で軽快な作者そのものだ。一見戯れ言のようだが奥に味がある。

最後に冒頭掲出の句を。地球という星の命に思いを馳せた句で、〈二月の青い地球のワルツかな〉〈二百十日アンモナイトの眼が笑ふ〉(共に『地球のワルツ』)に続くものだ。

想像力と共に時空を大きく捉えて、気宇壮大なロマンが現出する。デボン紀は約四億年前、古生代。多くの魚類の出現と進化で知られる。アンモナイトや三葉虫、シーラカンスの出現もこの時期とされる。ともあれ、五月の海から、「デボン紀の青」を希求するところが非凡で、古代への夢と想像力を伴った、少年のような夢想が愉しい。このような宇宙的な生命感を探索する新展開も楽しみだ。

木星のかがやきに揺れ蚊柱は

はりまだいすけ

（俳誌「斧」平成二十九年八月号より）

〈素志いまま草刈鎌を研ぎつつに〉〈刈草の余熱に星の生まれけり〉に始まる主宰の十五句。二句とも重心の低い句ながら広やかさが感じられる。さらに続く「神戸王子動物園五句」という前書付きの五句の自由さも愉快だ。

猩々の乳房や芭蕉玉を解く

梅雨茸の紅を怖れて蟻食は

黴くさき檻にかんむり鶴の羽根

梟の雛を鳴かせて早る月

斑猫や青ほのかなるマリア像

よく「動物園俳句などつくるな」と言われるが、特に第一句などを見ると、檻や柵など取っ払った世界の豊かさを感じる。柔軟な共生感覚から生み出される俳句というのは、このように読み手にも豊かな心持を与えてくれるのだ。

他にも、〈火蛾の夜のピアノは黒をかがやかす〉〈天金の聖

書に落ちし火蛾の翅〉〈秀峰を仰ぎて喜雨に打たれけり〉と佳品には事欠かず、作者の生活圈は何と生命感に満ちているのだろうと感じる。ピアノ、聖書、秀峰それぞれが自然といのちの交感を果している。

冒頭の「木星」の句も、遙かな天体と卑近の蚊柱が共振しているさまをズームアップしたような感覚で描かれていて愉しい。にんげんの普通の目には見えなくても、想像力を凝らすと心に見えてくるものがある。木星は、もちろん肉眼にはぼんやりとしか映らない。しかしながら、宇宙旅行でもして近づけば木星の「かがやき」が我々の全身を照らします。作者は、「木星」の根源のエネルギーを想像力と共に感受しながら、実際の木星を眺めているのだろう。一句の最後を「は」で軽やかに止めるような句型は、へたはぶれに美僧をつれて雪解野は 田中裕明〉などを思い起こさせるが、文体の軽やかさが「蚊柱」によく働き、微小動物の根無し草のような揺らぎに、明るい生命感が吹き込まれたようにさえ見える。広大な宇宙から見れば地上のにんげんたちもさながら「蚊柱」。宇宙や地球の恩恵と根源的なエネルギーを感じながら「いのち」の姿を把握したいものだ。

花びらの上で明日を組みたてる 荒木洋子

(軸創刊五十周年記念俳句大会作品より)

俳誌「軸」(主宰・秋尾敏)が創刊五十周年を迎え、六月二十五日に記念俳句大会祝賀会が催された。ご尊父・河合凱夫から引き継いで五十周年、及びその俳句への姿勢に「軸のぶれ」のないことを皆が讃えていたが、「軸」六月号には、「軸の光陰」の中に秋尾主宰の姿勢が分かりやすく述べられている。

『軸』の句は、たとえ席題であろうと、作者の生活から無関係には詠まれない。古典を踏まえたとしても、幻想を詠んだとしても、本歌取りをしたとしても、不思議さを見せたとしても、それらは皆手法であって、内実はすべて作者の実生活上の思いから発せられている。虚構の核心に、作者の思いがあるということである。／『軸』はそれを新鮮に表現しようとする。新鮮と言うからには、既に用いられた語法は捨てねばならないから、表現が変化しないわけがない。少なくとも私はそう心がけてきた。」

同号には、秋尾主宰の〈雨浴びて最後の薔薇になるつもり〉(薔薇一輪愚直光を演じきる)という新作も発表されている。薔薇になりきって自分の意志を述べた句である。単なる見立ての擬人化を超えた詩想の強さを感じる。

さて、冒頭掲出の作は、記念大会作品の中から私と「かびれ」主宰の大竹多可志さんが特選にいただいたものである。ちなみに秋尾敏主宰・対馬康子さんの特選句は〈蝶の腕組み一足す一はかすかに毒 諸藤留美子〉だったが、この尖鋭性に比べると私の選んだ句はソフトテイストかもしれない。最初のイメージは樹上の明恵上人像よろしく作者が桜の木の上に坐している姿であったが、私の想像は、すぐに落花した花びらを敷いて座している姿、(以下多少の勇み足を承知で言えば)花びらの上に微小の姿(あるいは想念)となつている作者、どの花びらの上にも微小な人間が座している姿、などと次々に変化しつつ広がった。いずれも「花」に付きものの「散華」のイメージから離れ、作者はレゴでも楽しむかのようになり、夢を織り込みながら自分の未来を明るく組み立てる。ひよっとしたら、「軸」五十一年目への新たな出発への言祝ぎだったのかもしれない

ピアノピアノニツシモ猫の子が眠る 川村研治

（句集『ぴあにしも』平成二十九年・現代俳句協会刊）

作者は昭和十四年生まれで、昭和五十年以来「楨」（平井照敏主宰）、「寒雷」（加藤楸邨主宰）、「ににん」（岩淵喜代子代表）などで俳句を詠んでこられた。すでに句歴は四十年以上、昭和六十一年に第一句集『花野』を上梓されていて、今回の句集はその後の作品五百七十句を収めた第二句集である。また、現在は富士山麓病院新聞の編集長をされ、認知症の問題に向き合っておられるようだ。

「人と人との心のやりとりは、弱いことこそ強さなのだとあらためて思うようになっていく。自分の言いたいことを叫んだり、考えを押しつけるのではなく、読者の懐に少しずつ入りこんでゆく、といったことをこれからも考えていきたいと思っている」。このあとがきは、俳句のみならず、作者が合唱の経験や認知症専門の病院での新聞編集などのかかわりも通してたどり着いた生き方でもあった。

俳句では時折は強い言葉も現れるが、全体的には観察を通

したものの主観的把握であり、抑制した優しいことば遣いながら、読者の心にしずかにしみいる句が多い。滋味に満ちた平易で穏やかな句集である。私の好きな句を引かせていただく、〈蟬の穴先が曲がつてゐたるなり〉〈木の中の明るきところ秋の蝶〉〈やさしきはやや暗きもの枇杷の花〉などには作者の繊細な感覚がうかがえる。また、〈箱庭にだんだん入つてゆくやうな〉〈しぐるるや挽歌となりし一つ岩〉〈壁につきあたる毛虫の頭かな〉〈にんげんの貌はでこぼこ冬桜〉などには、人生行路を思わせる暗喩性や人間批評に基づく諧謔味も味わい深く伝わってくる。

さて、冒頭掲出の作だが、よく遊びよく動き回っていた子猫がおとなしくなり、やがてすやすやと眠ってしまった。そんな情景であろう。そのさまを、最初は弱いピアノの動きから超弱いピアノニツシモの動きへと変化していく、と音楽用語を用いて表現された。猫の子の動きを音の強さを借りて表現したのだ。だが、ペダンティックな押し付けがましきはない。ふだん接している日常世界のことばを自然に柔軟に充てた印象を受ける。ひよつとしたら子猫の名は「ぴあにしも」かも、などという愉しい邪推も許されようか。

ふくろふの涙で森のながれだす 石川富美

（平成二十九年三月二十日。第二十六回

にいがた俳句フェスティバル募集句より）

三月下旬に新潟県現代俳句協会にいがた俳句フェスティバルに招かれ、「文挾夫佐恵と現代俳句」の講演をさせていただきました。会場は上越線の燕三条駅から車で十分ほどの三条市東公民館。参加者は約八十名。なにしろ新潟県は南北に長いので、集まるのも一苦労の様子。しかしながら、事前の応募句は千三百七十句と地方の俳句熱は健在である。

この大会では、応募句では〈遠嶺まで一枚になる冬田かな 長谷川きみこ〉、席題の部では〈春泥や一戸のための道普請 佐野哲之〉が互選の第一位に輝いた。私も両句ともいただいた。ともに、情景がはつきりと見える風土性豊かな句である。都会にいと渴いてしまう心の中がいつとき潤うのを覚えた。地方の句会の愉しみの一つでもある。

さて、事前応募句の中で私が特選の一番にいただいたのは、冒頭掲出の句であった。特別選者の中では、対馬康子さん

も特選にお採りであった。想像力を働かせた個性的な物語性の強い句である。

「鼻」というのは、西欧神話では芸術の女神アテナの象徴や、「ミネルヴァの鼻」で知られるように知恵の神の象徴である。以来、森の知者のイメージが強い。日本では、シマフクロウがアイヌの神として知られていよう。生態的には、視力は人間の何十倍も感度がよいのに視野は狭く、そのために首が百八十度回転するのだという。パラボラアンテナのような少しくぼんだ顔は微小な音をもとらえる。人間から見ればやはり超能力者の生き物である。この句はイソップ物語のような寓意を孕んでいる。人間の驕りで自然を壊してはいけない。森の知者である鼻を泣かせてはいけない、というメッセージを含んだ警告の句である。建設工事などの自然破壊も、放射能など見えないかたちの環境破壊も、ともに避けなければいけない。破壊が進めば、森の神は悲憤のあまり、自らの命と引き換えに膨大な涙を流し、やがては森そのもの（人間の棲む根源的な基盤とも言える）をも流してしまうだろう。森の神である鼻の死は、もちろん人間生活にとっても終末風景でもある。想像性豊かな大きな句に出合った大会であった。

雲海の果ての寂光いのち愛し 鈴木詮子

（昭和六十三年作。句集『巖門』牧羊社刊）

ただいま現代俳句協会の七十周年記念行事の一つとして、歴代会長や協会賞受賞者などの「筆墨集」の企画を進めている。鈴木詮子さんも昭和四十八年に協会賞を受賞しているので、リストに名前が入っている。色紙や短冊を何人かに問い合わせたところ、上掲の句の色紙を小笠原至さんが所蔵していたので、今回はそれを載せてもらうことにした。

新しい方も多くなつたので、作者について簡単に触れておくと、大正十三年東京生まれで、平成九年にご逝去。昭和十八年、海軍第十三期予備学生として入隊し、元山航空隊にて零戦に搭乗された。復員後は、東大経済学部を卒業し、のちに「雲母」（主宰・飯田蛇笏）青潮会に入会。ここで石原八束の知己を得て、三好達治を囲む文章会に参加。昭和三十六年「秋」創刊に同人参加する。当初は「秋」は共同編集制であったから、詮子さんは「秋」

の中心的存在でもあった。硬質の抒情と言われた初期作

〈地の凍てを流るる泉遠からず〉〈凧や叫び高まる地の力〉などは、いま読んでも新鮮で力がこもっている。

さて、この句は、昭和六十三年、欧州旅行からの帰途に詠まれたもの。「シベリア上空 三たび」の前書がある。詮子さんは海外俳句も多いが、このときはドイツ、スイス、フランスなどに遊び、シベリア経由の航路にて帰られた。〈ゴチツクの塔に蝟集の町暑し〉〈王の居間稲妻蒼く走りけり〉〈教会の塔を揺るがす滝百丈〉〈天高しマッターホルン親指ほど〉〈騎馬像を斜めに深く切る秋日〉など三十六句の最後に置かれた句である。

この句で、作者は雲海の彼方に寂光浄土のような光を感じ取っている。少々神秘的なうつつすらとした光であるうか。分かって欲しい人にだけ伝えたい、若き日の遺書めいた雰囲気も多少ただようが、永遠の寂光浄土にやがて包まれる安らぎを願いながら、わが命がより愛しく感じられるというのである。もちろん、蛇足ながら、戦地に散った人たちの命にも思いを馳せながらのことではあろう。

藍微塵死が見えてきぬふりかへる 石原八束

(昭和五四年作・句集『藍微塵』五月書房刊)

藍微塵は勿忘草の俗称。この句から思い浮かぶのは、
死が見ゆるとはなにごとぞ花山椒 齋藤玄

の絶唱であろう。玄の「なにごとぞ」とは、「はや、死が見え
るとは推参な、と、死を叱咤する最後の怒り(中略)憤怒す
る気力はすでにない。ただこの不条理を、多少の微笑をもつ
て叱りおくのである」(近藤潤一)との名解釈がある。

これに対して、八束の「死が見えてきぬ」は大分余裕がある。
むしろ、敬愛する詩人・三好達治への共感性が底に流れてい
るような気さえする。達治の詩における「藍微塵」の可憐で
淡き風情は、達治の悲恋の相手「萩原アイ」への思慕と訣別
の苦き思いを仮託したものであった。

水のほとり 三好達治

水のほとりに来てみれば

み空のいろの艸の花

藍微塵とて名もはかな

ひとのころのながき日を (詩集『花筐』)

達治の「萩原アイ」に代わるものは、八束の場合、もちろん
難病に早世された先妻「洋子夫人」であろう。だが、句の個
人的背景の詮索はあくまで余分なことだ。

一般的な一句独立としての読みならば、
かたまつて薄き光の莖かな 渡辺水巴

の洗練された美意識への傾倒を感じとるべきであろうか。「可
憐な風趣」(八束)の藍微塵に「莖」のような光が見えだした
とき、「莖」の句が

うすめても花の句の葛湯かな 渡辺水巴

と同年に詠まれたことに思い至れば、八束の胸中にはこの「
莖」と等価にある「澄んだ光を思わせる死」への憧れがおの
ずとちらついたにちがいない。

人生行路の先に「藍微塵」の光が突然見え始めたとき、さす
がの八束も思わず来し方を「ふりかへる」のだった。まるで、
死神が後ろに迫ってきてはいないかを確かめるように。「多少
の微笑をもって叱りおく」という悟りに比べると、まだ遙か
先のことと感じられたのだったが、八束もすでに藍微塵の光
をすり抜けて遠い世へと去ってしまった。